第３課　初代教会の生活

【暗唱聖句】

「そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」使徒2：46，47

【今週のテーマ】

今週は初代教会の様子について学びます。

【日曜日・教えることと交わり】

「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」使徒2：42

初代教会の様子について、使徒たちが教え、熱心に祈り、そして共に食事をし、互いに交わることを大切にしていた様子をうかがい知ることができます。イエス・キリストから直接教えを聞くことができなくなったいま、御霊に満たされイエス・キリストから直接学びを受けた愛弟子たちからの教えは貴重なものでした。また初代教会を際立たせていたことの一つが、家ごとにともに食事をし、互いに交わったり、助け合ったりすることを大切にしていたことです。

「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った」使徒2：44，45

信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである」使徒4：34，35

なぜ、彼らは財産を共有し、助け合いながら生きることができたのでしょうか。一つは終わりが近いゆえに私有財産を所有することは重要ではないと考えたのでしょう。しかし、さらに重要なのは、まさにこれこそ聖霊の働きなのです。このような財産の共有によって互いの一体感はさらに強まっていきました。初代教会のクリスチャンたちはしばらくは神殿に通っていたようですが、彼らの聖霊に満ちた礼拝を特徴づけるものは主にそれぞれの家で行われました。

【月曜日・足の不自由な男をいやす】

「ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った」使徒3：1

ペテロとヨハネは3時の祈りに神殿に上って行ったと書かれてあります。つまり聖霊体験をし、キリスト教がこれから広がり新しいことが始まろうとしているとき、しかし彼らはこれまでのユダヤ人の習慣として3時になると神殿に祈りに行ったのは興味深いことです。キリスト教を信じていくということは、日本人が日本人をやめるということではないということです。

　彼らが神殿に祈りに行ったとき、足の不自由な男性を癒すという奇跡が起こります。それを通して再びペテロは説教をする機会を得ました。そこで語ったメッセージの論点は以下のことでした。

① イエス様は苦しみのメシアだった。

② 神様はイエス様を復活させられた。

③ イエス様は天で高められた。

④ イエス様は再び戻ってこられる。

⑤ 罪が赦されるためには悔い改めが必要であること。

現代においても私たちが語るべきメッセージの中心は同じ、すなわちイエス・キリストが中心でなければなりません。

【火曜日・反対が起きる】

しかし、やがてエルサレムの宗教指導者であったサドカイ派やファリサイ派から反発が起こります。特に大部分を占めていたサドカイ派は復活を信じていなかったために、ペテロがイエス・キリストが復活されたことを語るのを快く思っていませんでした。結局捕らえられ、最高法院に引き渡されるのですが、そこで再びメッセージを語ることになります。その中で大祭司をはじめ議員たちは脅威を感じさせるものがありました。そこで彼らは使徒たちが何の権威によって語っているのかを問題にします。

「使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した」使徒4：7

この質問に対してペテロは「あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです」（使徒4：10）とキリストの名の権威によって行っているとはっきり答えます。そして「わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」（使徒4：12）と、イエスの名の権威は人類の救いにまで達するのだと続けます。つまり、ペテロは当時の最高権威を前にしているのですが、自分たちは彼らではなく、さらに高い神の権威に仕えているのだと語っているわけです。そしてその権威には人間が持ちえない権威があることを、実際に祈りを通して足の不自由な男性が癒されることによって証明したのでした。無学な元漁師であったペテロやヨハネの雄弁さや勇気は、まさに聖霊に満たされていた証拠であり、そこにいた人たちを驚かせました。最終的に議会は「二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した」（使徒4：18）と言い渡すのですが、それに対して彼らは恐れることなく、こう言ったのでした。

「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。 わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」使徒4：19，20

【水曜日・アナニアとサッピラ】

「たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ――「慰めの子」という意味――と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた」使徒4：36，37

初代教会の特徴は互いに財産を出し合って助け合っていたことでした。個人的に大きな額を捧げた一例としてバルナバ（ヨセフ）のことが記録されています。彼は持っていた畑を売ってその代金を捧げました。ところが、ここで衝撃的な事件が起こるのです。アナニアとサフィラの物語です。彼らも土地を売ってそのお金を捧げたのですが、一部を自分たちのところに残しておきながら、代金をすべて捧げたかのように言ったのでした。これが大きな問題となって二人とも使徒の前で即死するという悲劇的な結果を生むことになります。

　何が問題だったのかというと、ペテロが指摘したのは「サタンに心を奪われ聖霊を欺いた」（使徒5：3）こと、「主の霊を試した」（使徒5：9）ことでした。本来、土地を売るのも売らないのも彼らの自由でした。また献金を全額するのも、一部するのも彼らの自由でした。聖霊を欺いたのだとペテロが語っていることから、二人が土地を売って献金しようという気持ちになったのは聖霊がそのように導いていたことがわかります。聖霊に促されて彼らは土地を売って献金をする決心をしたのです。ここまでは素晴らしいことでした。ところがサタンが試みていたのです。それは一部を手元に残したいという誘惑、さらにすべてを捧げたかのように装って、自分たちに対する評価を高めたいという誘惑でした。聖霊の働きに対して、サタンの侵入を許し、それに屈してしまったのでした。この事実をペテロはやはり聖霊に導かれて瞬時に悟りました。

　この物語が衝撃的なのは、悔い改めの機会が与えられることなく二人とも即死してしまったことです。この厳しい裁きに私たちは驚きの禁じ得ないのです。しかし、今このような神様を欺いたために即死に至るということはあまり聞きません。何が違うのでしょうか。

初代教会は聖霊が初めて降り注がれスタートしました。驚くべき恵みと神様の力強い御手が伴いました。彼らはそれを目の当たりにしてきました。聖霊抜きの教会はあり得ないことでした。そのような聖霊に満ちた状況の中で、その聖霊に逆らい、欺こうとしたのでした。これは教会がこれからますます聖霊によって進展していく中にあってあってはならないことでした。イエス・キリストは次のように言われました。

「しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」マルコ3：29

アナニアとサフィラの死は初代教会の人たちにも強い衝撃を与えたことでしょう。神様は教会がスタートしたとき、聖霊の導きに逆らってはならないということをこのような衝撃的な出来事を通して教えられたのです。アナニアとサフィアの出来事は教会に神様に対する恐れを引き起こしました。わたしたちはアナニアのように即死するというようなことがなかったとしても聖霊に逆らうならば、やがて永遠の滅びに落ちていくことになることを覚え、神様を恐れつつ歩むことが大切です。

【木曜日・二度目の逮捕】

アナニアの出来事以降も使徒たちがますます霊に満たされ、不思議な業が伴うにつれ、宗教指導者たちの嫉妬も激しくなっていきました。そして、ペテロは二度目の逮捕となります。しかしこのとき神様は牢獄の鍵を解き、牢から逃がすという奇跡を行われます。徐々にクリスチャンに働く神様の力の可能性を考え始めます。そのような状況の中で、ガマリエルというユダヤ人の中で非常に高く評価されていた律法学者が登場します。彼は実に冷静な人物で、クリスチャンに対しては次のように語りました。

「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしなさい…あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ」使徒5：35～39

この冷静な意見に一同は従い、「使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した」（使徒5：40）。